
幻夢抄録 目覚め 6章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 目覚め 6章

【Nコード】

N0820A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

故郷の村に、無事到着した二人。村に、飛び交う喧噪に、涙ぐむ氷魚だった。少しずつ、軋りながら、錆びついていた目覚めの齒車が、今、動き始める!?

幻夢抄録 目覚め 帰還

「すごい…」

氷魚は、村の、活気溢れる様に見はった。

木材を組み立て、釘をうつ音、人々の喧噪が、飛び交っている。

人として暮らしていた、もう一つの故郷にも、なじみ深い光景だ。

「氷魚…」

瑪瑙は、氷魚を気遣い、彼女の肩をそつと抱いた。

「なんだか、切ない…ここが、あたしが…本当に生きるべき場所なのね？」

「柘榴も満足してるだろ、お前が、戻ったんだからな」

「そう、なのかな…」

氷魚は、村を見渡した。

焦土の地面には、小さく、弱々しいながらも、草の芽が芽吹いている。

戦火に灼かれても、なお生きようとする、懸命さが、この村の人々と、ひどく似ていた。

「強いよね、みんな…」

「ああ。ここで、生きていこう、二人で」

「うん…」

二人の唇が、重なるうとした瞬間、そんな甘やかな雰囲気、突然破れた。

瑪瑙の頭に、木材の切れ端が、直撃したからである。

「い、っで！？ってえ…」

「瑪瑙ッ、だ、大丈夫！？」

オロオロとする氷魚。

「お すまん、ああ、おい、大丈夫か？んなとこで、いちやついてっからだぞ？」

「こ、ごめんなさ…」

その時、謝ろうとした氷魚を、瑪瑙が遮った。

「なあにしゃがる！？このクソ親父っ！氷魚にぶつかったら、どうするんだっ」

「え？」

氷魚は、屋根の上にいる男と、瑪瑙を見比べた。

瑪瑙の、父親らしき男は、身軽に屋根から降りると、二人の方に近づいてきた。

「ったく！わざとぶつけやがって…まだいたのかよ」

頭をさすりながら、毒づく瑪瑙。

「お前こそ、女ひっかけて戻ってきやがって…柘榴の妹は、見つかったのか？」

「あ、あの、瑪瑙？」

一人、取り残されていた氷魚は、おずおずと瑪瑙に声をかけた。

「ん？ごめんな、なんだ？」

「そのヒト、瑪瑙の、お父さん？」

「ああ。残念がらな」

苦笑ぎみに、瑪瑙は言った。

「あ？なんだ今のは…聞き捨てならんなあ」

「あんだよ、文句あつか！」

「大ありだ！」

（なんか、二人ともそっくり…おもしろいかも）

氷魚は、そんな二人のやりとりにも、おもしろそうに、くすくすと笑った。

「ねえ」

「え？ええっ！？」

氷魚は、いつの間にか、側にいた彼に、驚く。

「君さあ、どこかで会ってないかい？」

「っただあ！またそういう、ありきたりなっ、こいつが、柘榴の妹だよっ」

瑪瑙は、氷魚を庇って、きつく抱き寄せた。

「く、苦しい、瑪瑙」

「だからかあ、どうりで懐かしい感じがしたわけだよな。よく帰ってきてくれたね、えーと…君の名は？」

「ひ…」

答えようとした、氷魚の代わりに、また瑪瑙が言った。

「氷魚、だ。さっきも言ったが、柘榴の妹で、俺の嫁さんだ」

「嫁、ねえ…どうせお前のことだ、ムリ言って迫ったんだろ？」

「ちっ、ちげーよバカ！おら、さっさと仕事戻れっ、行くぞ、氷魚」

「あ、うんっ！」

呆けていた氷魚は、慌てて、瑪瑙の後を追いかけていった。

幻夢抄録 目覚め 帰還（前書き）

無事、故郷の村に到着した二人。

二人は、暫しの休息をとった…

異界が舞台の、壮大スペクタクル。

幻夢抄録 目覚め 帰還

「瑪瑙ってば、どこまで行くの？」

二人は、村はずれの、畑の脇を歩いていった。

「俺ン家、もう、村に戻ったんだし、寝る場所が必要だろ？」

「え？」

氷魚は、首を傾げた。

「ほら、ここだ。二人で棲むには、ちとキツイかもしれんが」

「え…ここ」

そこには、石造りの、一戸建てが建っていた。

「こいよ、氷魚…ひとまず、休もうぜ」

「うん。あつ！土足ツ、靴脱ぐから待って…」

「そんなん、後でいいよ」

扉を閉めると、言うよりも早く瑪瑙は、氷魚を抱き寄せて、居間に据えていた、ながいす榻に座った。

「長旅、ご苦労さん」

瑪瑙は、氷魚を、膝の上に座らせて抱き締めた。

「瑪瑙…苦しいわ」

腕の中で、氷魚は、じたばたともがく。

「離さない」

「や んっ」

氷魚が、もがけば、もがく程に、腕は締まっっていく。

「けほっ…けほ！」

「悪い、やりすぎた…平気か？」

「口きいてやんないものっ」

っん、とそっぽを向く氷魚。その頭を、瑪瑙はくしゃくしゃとかき混ぜた。

「なにすんのよバカあ っ！」

瑪瑙の手を叩き落とし、氷魚は、瑪瑙を追いかける。

子猫のようにじゃれ合い、いつの間にか、どちらからともなく、笑い出していた。

「きいてンだろ、口…」

面白そうに、瑪瑙は笑う。

「いじわる…」

「もっと、してやるか？」

「いらないわよっ、もう…」

「もう？」

「子供みたい…」

「悪かったよ、ごめん」

「んっ、どうしよっかなあ」

「許せ」

瑪瑙は、こっん、と額と額を合わせて言った。

返事の代わりに、氷魚は、瑪瑙の胸を、拳で軽く叩く。

「散歩してくる」

「俺も行く、いいか？」

「うん」

畑の側を、村の方へ歩いていく途中に、二人の側を、子供が三人、笑い合いながら走っていく。

「ねえ、瑪瑙」

「ん？」

「ありがとね？あたしを、ここまで連れてきてくれて」

ふわり、と柔らかに笑う彼女に、瑪瑙は一瞬、胸の高鳴りを覚えた。

「お、おう」

風が渡り、彼女の鮮やかな赤い髪を、一頻りなびかせていく。

両腕を広げて、遊ぶ彼女の姿は、まるで、風のように、いや、風そのものの様に思えて、瑪瑙は、目を見はる。

その場所から、動くことができなかった、瑪瑙は、その時初めて『怖い』と思った。

消えてしまっ、なぜかそう思った時、氷魚を、きつく抱き締めていた。

「やだ、どうしたの？怖い顔して」

「どこにも、行くな…」

「ヘンな瑠璃、行ってくて、どこに？あたし、まだ右も左も分からないのよ？」

「あのまま、飛んでいきそうだった…」

「え、あたしが？」

不思議そうに首を傾げ、氷魚は笑った。

「もういいよ、なんでもねえ」

そっと、彼女を放してやる。

「やっぱりヘンなの、ほらほら、早く行こうよ」

「ん…」

無邪気に笑う彼女に、言いしれぬ不安を感じるのは、なぜだろうか？
ひどい、胸騒ぎがする…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820a/>

幻夢抄録 目覚め 6章

2010年10月13日17時25分発行